横道下遺跡

昭和54年度団体営土地改良総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

1987.3

長野県原村教育委員会

序

原村が位置する八ケ岳西麓の一帯は縄文時代の遺跡の宝庫ともいえるほど数多くの遺跡が埋蔵されていますが、このたび発掘調査報告書を刊行することになりました「横道下遺跡」も八ケ岳の裾野に広がる数多くの遺跡の中の一つであります。

付近には、家裏遺跡・恩膳遺跡などの大規模な集落遺跡が存在し、それらの遺跡との関連性も考えられる環境にあります。

今回の発掘調査は、昭和54年度団体営土地総合整備事業大久保地区の工事実施に先立って原村教育委員会が行ったものであります。

このたびの発掘調査にあたり、調査団長の武藤雄六氏をはじめ、調査員、調査参加者の方々には大変な御尽力を頂きました。衷心より感謝いたします。また、調査報告書の刊行の過程におきましてお世話になった関係者各位には厚く御礼を申し上げます。

昭和62年３月31日

原村教育委員会

教育長　平林　太尾

例　言

1．　本報告は、昭和54年度団体営土地改良総合整備事業大久保地区に先立って実施した、長野県諏訪郡原村大久保に所在する横道下遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、原村教育委員会が昭和54年10月１日から12月22日にわたり実施した。整理作業は、昭和61年５月15日から28日まで行った。

3．　執筆・図面の作図とトレース・写真撮影は平出一治、土器の拓本・石器の実測とトレースは平林とし美が行った。

4．　本調査出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、原村遺跡番号である４の数字を表記した。

表紙地図10,000分の１　○印が横道下遺跡

Ⅰ　発掘調査の経過

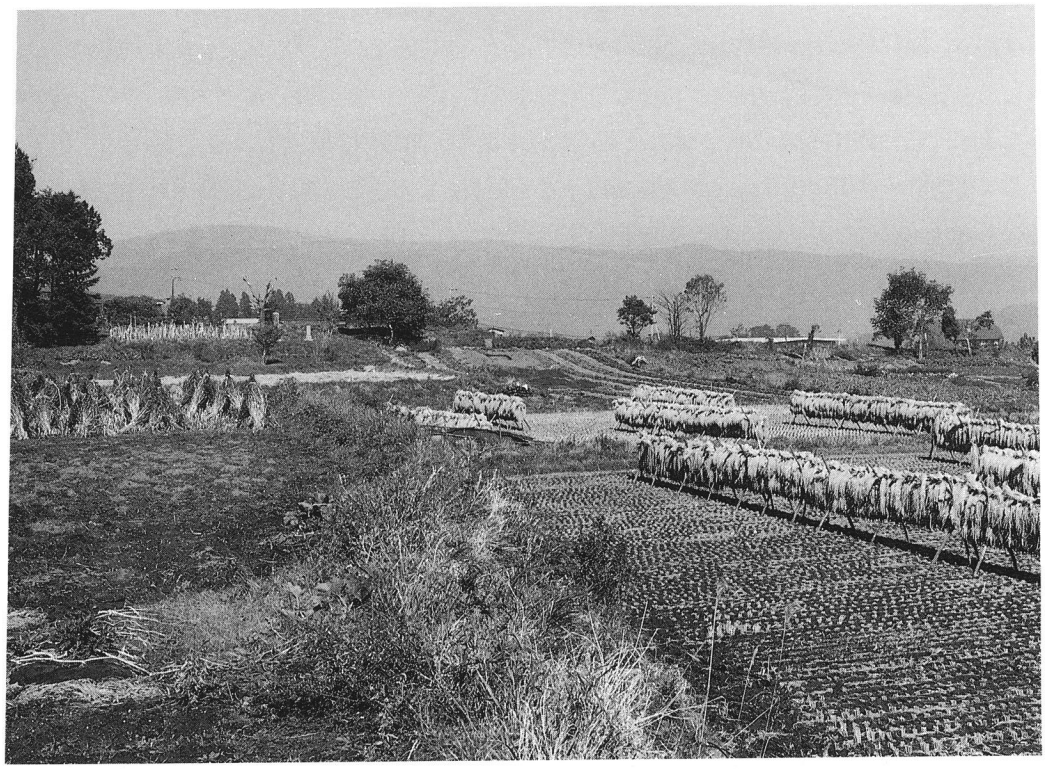
1　発掘調査に至る経過

村内における農業の近代化の波は著しく、大型機械の使用される機会は多くなる一方である。そんなことから、横道下遺跡から向尾根遺跡にかけた一帯が、昭和54年度団体営土地改良総合整備事業計画として進められてきた。

村教育委員会では、遺跡の範囲を確認するために、昭和53年12月８日に工事予定地域内の分布調査を実施した。その結果をもとに原村役場振興課（現在は農林課）と数回にわたる保護協議を行い、昭和54年度に発掘調査を計画した。

その後、地元に対する説明と協議を行い、横道下・向尾根両遺跡の緊急発掘調査を昭和54年10月１日から12月22日にわたり実施した。

2　発掘調査日誌



第１図　横道下遺跡遠景

昭和54年10月１日　今日から発掘準備をはじめる。

10月12日　地元の委員会と打ち合せ。

10月16日　発掘器材・テント等の搬入。

10月17日　教育長・調査担当者の挨拶のあとテント設営。グリッド設定とグリッド発掘をはじめる（向尾根遺跡）。

10月23日　今日から横道下遺跡のグリッド設定とＤ地区のグリッド発掘をはじめる。

10月24日　Ｄ・Ｃ地区のグリッド発掘。CY－40グリッドから縄文土器破片と黒曜石が出土する。

10月25日　Ｃ地区のグリッド発掘。CU－51グリッドから縄文土器破片出土。午後はグリッドの杭を抜き片付けをして、向尾根遺跡の発掘に合流する。

II　遺跡の立地

1　位置と環境

横道下遺跡（原村遺跡番号４）は、八ケ岳西麓の諏訪郡原村大久保にあって、大久保区の南、中央本線茅野駅の東方約５㎞に位置している。

遺跡は、前沢川の支流の浸蝕によって形成された、ほぼ東西に延びる細長いやせ尾根の上に立地している。南と北の浅い沢は水田として利用されているが、水の便はあまり良くない。遺物の散布範囲は150m四方位である。地目は普通畑と宅地で、遺跡の保存状態は良くない。

八ケ岳西麓一帯の尾根には、縄文時代の中期を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この横道下遺跡の周辺にも、大小様々な遺跡が点在している。それは第２図および表１に示したとおりである。

これらの中ですでに発掘調査されている遺跡に、第２図１の家裏遺跡（縄文時代中期後半の集落跡）、本調査と平行して発掘調査を実施した３の向尾根遺跡（旧石器時代）、78の弓振日向遺跡（旧石器時代、縄文時代中期中葉の集落跡）がある。

しかし、発掘されたとはいえ、その対象範囲が狭い遺跡もあり、それぞれの時代も異なっていることから遺跡間における相互関係については、まだ不明な面が数多く残されている。

2　これまでの調査

本遺跡は、昭和48～50年にわたって諏訪清陵高等学校地歴部考古班の手で実施された村内の分布調査で、縄文時代中期の土器破片３点と平安時代の土師器破片１点が採集され、「大久保前遺跡」として報告されたのが最初である。

しかし、「大久保前遺跡」の名称は、すでに県教育委員会で実施した、昭和46年度農業振興地域

表1.　横道下遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	家裏	○				○						○			昭和59年発掘調査
2	大久保前											○			消滅
3	向尾根	○	○			○									昭和54年発掘調査
4	**横道下**					○						○	○		昭和54年発掘調査
5	柳沢					○	○								地点不明
6	前尾根								○						地点不明
7	前沢					○									
16	恩膳南											○			
23	恩膳西					○						○			
24	恩膳			○		○	○					○			
78	弓振日向					○	○								昭和60・61年発掘調査

第2図　横道下遺跡の位置と付近の遺跡（1：20,000）

等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査において、現在の向尾根遺跡（第２図３）の呼称としていた。それで、同遺跡名で呼ばれた本遺跡と現在の向尾根遺跡が隣接しているということも重なり、混乱を来たしてきた。

たまたま、本調査実施前に、県教育委員会で実施した昭和54年度八ケ岳西南麓遺跡群分布調査の折に、これまでの混乱をなくすために、横道下遺跡と向尾根遺跡とに呼び分けることにして現在に至っている。

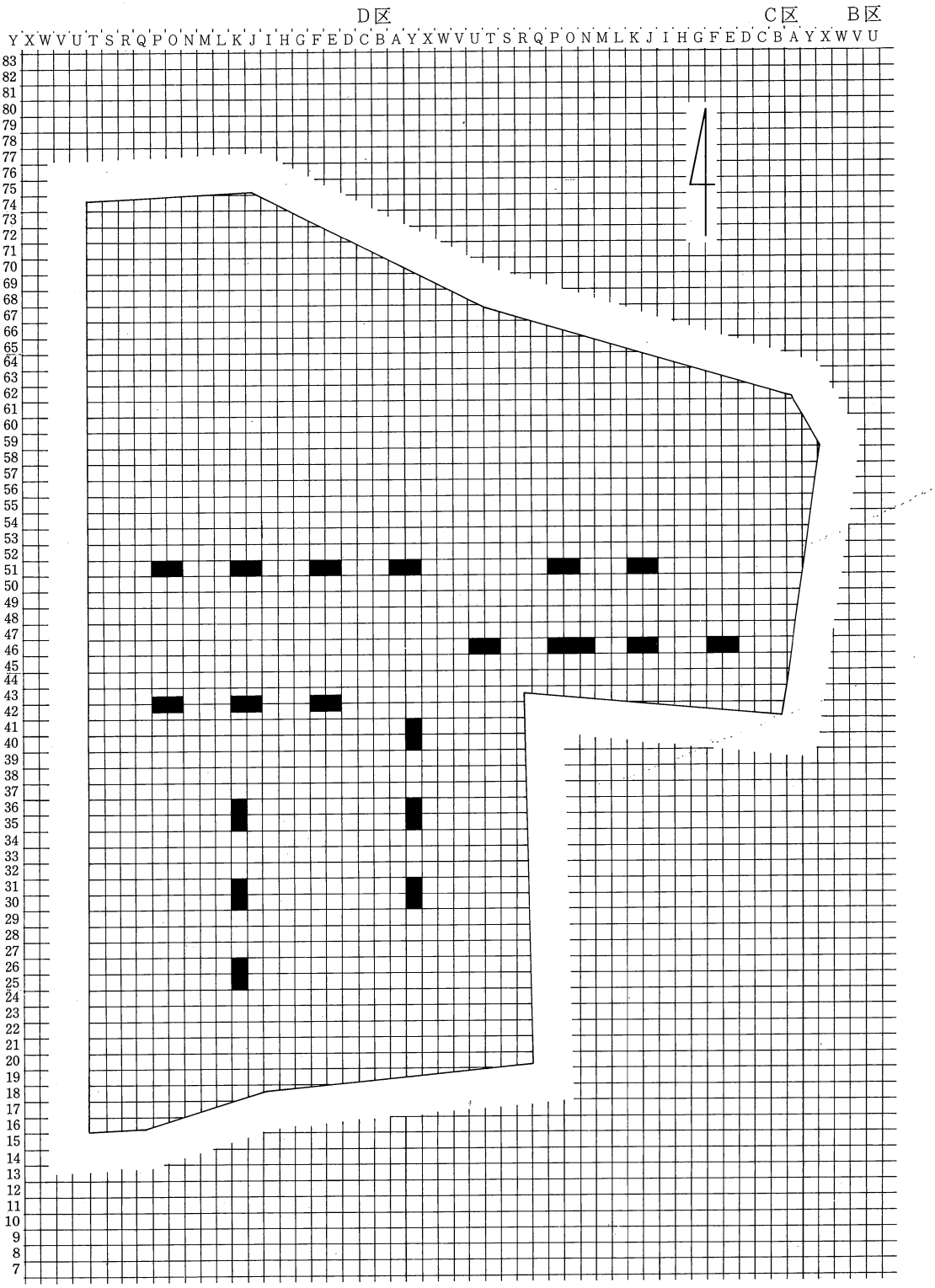
したがって、本調査は旧遺跡名の大久保前遺跡ではなく、横道下遺跡の緊急発掘調査である。なお、調査期間中に、本調査区のやや東寄りで以前に土器が発見されたという話を聞いたが、それは報告されることがないまま散逸してしまったようで、実見することはできなかった。

Ⅲ　調査の概要

１　グリッドの設定

限られた期間内で調査を円滑に進めるため、遺跡の性格を事前に把握すべく昭和53年12月８日

第３図　発掘調査区域図　地形図（１：2,000）



第4図　グリッド配置図（1：800）

に、ほ場整備事業予定地内の分布調査を実施した。その結果を参考にする中で、東西南北に軸を合せた２m四方を１単位とした基準方眼であるグリッドを設定した。

グリッドの東西方向には50mの大地区を設け、東からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに２m四方に分割した小地区の東西方向は、東からＡ～Ｙのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南方向は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振分けた。

なお、本遺跡は地形のあり方および前記した土器の発見などを考え合せてみたとき、ほ場整備事業予定地の東方（八ケ岳側）に広がるものと思われることから、地区割りを東からＡ・Ｂ・Ｃ区とした。したがって、本調査対象地域はＢＸラインより西側となる。

2　発掘の状況と土層

発掘は、基本的に２グリッド（２×４m）を１単位とした平面発掘を層位別にローム上面まで行い、第４図グリッド配置図に示したように45グリッド156m²の調査を実施した。

その結果、縄文時代については発見遺物が極めて少なく、遺構を検出するまでには至っていない。

また、事前に行った分布調査で、土師器・須恵器・灰釉陶器および内耳土器の小破片を僅か採集していることから、当地方における平安時代の遺跡立地を考慮し、南斜面の発掘も実施したが、遺物・遺構を発見することはできなかった。

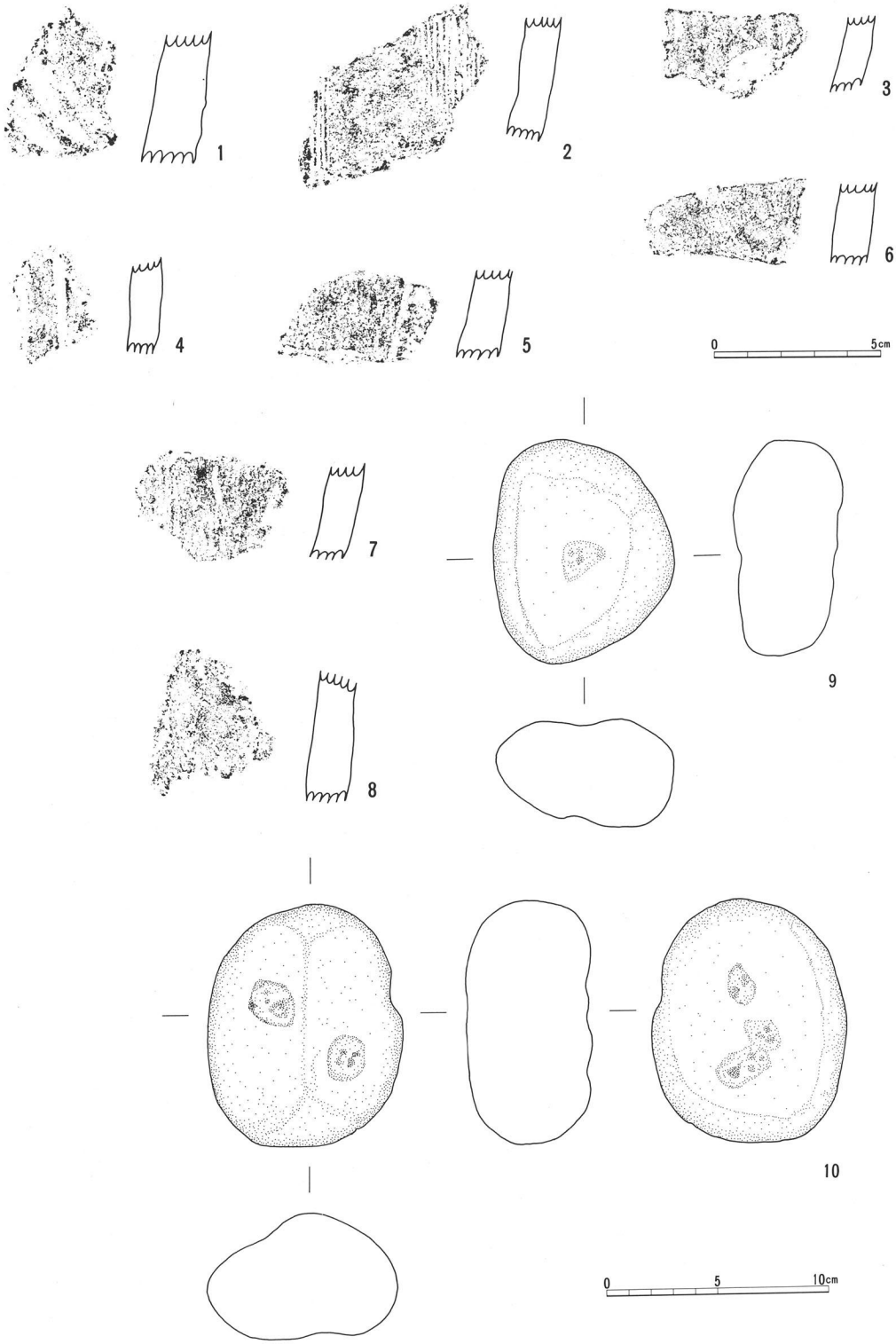
本遺跡の層序は尾根上と斜面では違いがみられた。尾根上は、耕作土の直下がローム層となってしまい、当初考えていたよりも浅く、その条件は極めて悪い。耕作土は10～15cmである。南斜面は深くなるが、安定した層序を示していない。上層から耕作土層、黒色土層ないしは礫混入褐色土層、礫混入ローム層となりはするが、時期不明の攪乱がはなはだしい。なお、斜面でも下に行くにしたがい礫混入ローム層までは深くなる。

Ⅳ　遺　　物

本調査で発見した遺物は極めて少なく、CU－51グリッドで土器破片２点、CY－40グリッドで土器破片２点と黒曜石の剝片１点を発見しただけである。また、土器破片４点と凹石２点を表面採集している。それらの遺物に若干の説明を加えてみたい。

1　土　　器

発掘資料４点と表面採集資料４点の計８点である。



第５図　縄文時代の土器拓影と石器実測図（１～８　１：２、９・10　１：３）

全て縄文時代中期後半の深鉢の破片である。小破片ばかりで明確なことはわからないが、第5図1は、隆帯で大きな渦巻き状の文様をえがき、その間は弱い沈線文の地文で埋められている曾利III式土器。CY－40グリッド出土。2はクシ歯状工具で施文された沈線文が懸垂するもの。3は弱い沈線文がやはり懸垂するものである。2点とも曾利IV式でCU－51グリッド出土。4ははっきりした2本の凹線文を懸垂させることによって、その間が幅広の隆帯状となる曾利IV式。CY－40グリッド出土。5～7は表面採集したもので、5と6には沈線文が施されている。7と8は素文であるが、7には整形痕が認められる。いずれも時期判別できるような文様はみられないが、胎土および焼成から曾利III式ないしはIV式であろう。

2　石　　器

CY－40グリッドから黒曜石の剝片1点が出土したが図示してない。第5図9・10の凹石2点は、輝石安山岩の転石を利用したもので、9は打痕による凹みを1個有する。実測図断面にみえる裏面の窪みは、素材に最初からあったもので人為的なものとは認められない。10は表面に2個、裏面に3個の凹みを有するが、全て打痕によるものである。2点ともトレーラーによって生じたと思われる新しい引っ掻き傷が認められる。

V　ま と め

発見した遺物は極めて少なく、遺跡の性格について述べることは躊躇させられるが、逆に遺物が少なかったことが本遺跡の性格を物語っているのであろう。

本遺跡と平行して実施した向尾根遺跡の発掘調査でも、遺構を検出することはできなかったが、曾利式土器の破片をはじめ打製石斧や石鏃を広範囲から疎らに発見している。本遺跡と向尾根遺跡を合せると、それは極めて広範囲におよぶ現象となる。両遺跡とも日常生活の場とは考えにくいものである。

そこで付近の遺跡に目を向けてみると、すでに発掘調査を実施し、曾利期の住居址を数多く発見している家裏遺跡（第2図1）と、調査されたことはないが、数多い曾利式土器が発見され、集落跡であることが容易に想定できる恩膳遺跡(24)がある。現在までのところ、これ以外には曾利期の集落跡は確認されていない。家裏・恩膳の集落遺跡と本遺跡は径1㎞以内にあり、直線的にみると両遺跡とも600mと近いところにある。したがって、集落遺跡と本遺跡が無縁であったとは考えにくく、ここでは、極論的とはなるが、本遺跡は家裏・恩膳の両集落遺跡で生活を営んだ曾利期の人々の生産活動の場と考えておきたい。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

1972．03　長野県教育委員会　『昭和48年度農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』

1975．07　諏訪清陵高等学校地歴部考古班「原村の考古学的調査　下」（『土』 9）

1980．03　長野県教育委員会『昭和54年度八ケ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』

1980．09　平出一治・五味一郎・高見俊樹　「長野県原村向尾根遺跡緊急発掘調査概報」（『長野県考古学会誌』38）

1985．07　原村役場　『原村誌　上巻』

向尾根・横道下遺跡発掘調査団名簿

団　　長　武藤雄六

調査担当者　平出一治

調　査　員　小林公明・長崎元広・岩崎孝治・鵜飼幸雄・佐藤信之・五味一郎・高見俊樹・島田哲男

調査参加者　真道岩美・牛山かつ子・牛山ことゑ・牛山昼江・牛山とく子・永田みえ・真道美智子・行田茂・阿部嘉子・五味かずえ・秋山きみえ・五味ふさ子・小池一二三・清水たつみ・清水たけよ・清水なみえ・中村ふさゑ・堀内美江・芳沢光世・芳沢つねよ・長林ミネ子・清水つねえ・小林みさ・藤原智恵子・宮坂とし子・小林静子・五味けさき・平林希佐子・芳沢みよ子・伊藤大四・菊池利光・岡本常幸（順不同）

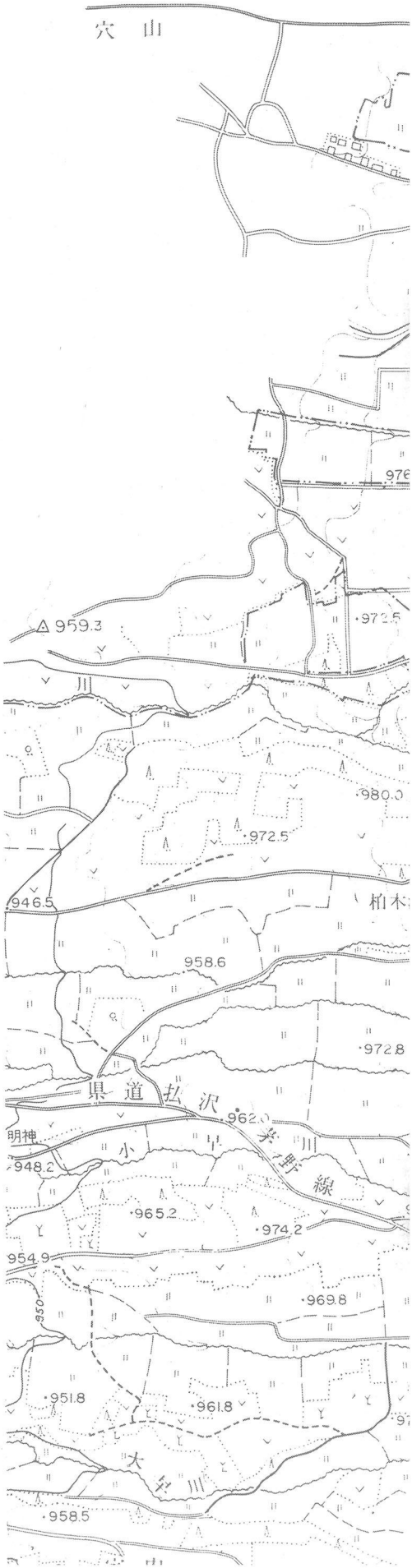
事　務　局　原村教育委員会事務局――松沢達（教育長）・行田竹輝（教育次長）・武田伊都子・牛山いさ子

原村の埋蔵文化財 7

横　道　下　遺　跡

昭和54年度団体営土地改良総合整
備事業に伴う緊急発掘調査報告書

発行日　昭和62年 3 月
発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村
印刷所　ほおずき書籍株式会社


穴山
959.3
972.5
980.0
972.5
946.5
柏木
958.6
972.8
県道払沢
962.0
明神
948.2
小早川
茅野線
965.2
974.2
954.9
969.8
950
951.8
961.8
大早川
958.5